



Title	巻頭言
Author(s)	岩谷, 將
Citation	年報 公共政策学, 17, 1-2
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89016
Type	bulletin (other)
File Information	17-1_Iwatani.pdf



[Instructions for use](#)

巻頭言

2022年の世相を表す漢字は「戦」でした。毎年末、アンケートにもとづいて決定され、京都清水寺で貫主が揮毫する一年を表す漢字ですが、「戦」が選ばれたのは2001年のアメリカ同時多発テロの年以来、2度目となります。

2月にはロシアのウクライナ侵攻が起き、戦いは今も続いています。ロシアはウクライナを支持する日本に対して制裁を発動し、地理的に隣接する北海道では、北方四島交流と自由訪問の破棄、北方領土周辺水域における安全操業協定の中断など、大きな影響が出ています。

東アジアに目を転じれば、北朝鮮によるミサイル発射は2022年だけで99発（CISI調べ）と、過去最高の2017年の24発の4倍にあたる数に達しました。また、ミサイルの種類も飛ばし方も多様化しています。

米中関係では、8月のアメリカのペロシ議長の見台に中国は激しく反発しました。3期目に入った習近平政権は、11月の米中首脳会談で関係改善を図りましたが成果なく終わっています。さらに2023年2月に起きた気球問題で、ブリンケン国務長官訪中が延期され、米中関係はますます冷え込み、台湾をふくむ東アジアの情勢はかつてない緊張下におかれています。

戦いは戦争だけではなく、感染症との戦いでもありました。年初には新型コロナウイルスに対するまん延防止等重点措置が各都道府県で再発令され、寄せては返す波のように幾度も襲来する感染の波に、これで最後と信じた人々の心を挫きました。しかし、夏にもう一度大きなピークを迎えた後は、年の後半にかけて事態は徐々に落ち着きを取り戻していきました。

最後までゼロコロナに徹していた中国ですが、民衆の不満に堪えかね、年末に突如ウィズコロナに転換しました。冬のピークと重なることから心配されましたが、今のところ報道されている限りにおいては、大きな感染拡大や変異種は報告されておらず、世界的に終息の兆しが見え始めています。

7月には安倍晋三元内閣総理大臣が選挙応援演説中に銃撃され、凶弾に倒れました。11月には宮台真司東京都立大学教授が刺傷する事件が起き、言論の自由を実力で封殺しようとする事件が立て続けに起きたことも記憶に残る一年でした。テロリズムに対する戦いもまた我々が向き合わなければならない戦いといえます。

我々が生活において身近に実感する戦いでは、やはり物価高との戦いも挙げておかなければなりません。ロシアのウクライナ侵攻を受けた、食糧および原油をはじめとする燃料の高騰は、世界的な食糧、燃料不足を招きましたが、とりわけその多くを輸入に頼る我が国にとって、影響は甚大でした。さらに追い討ちをかけるように、イン

フレ抑制のためにとられたアメリカの金利政策により円安が進行し、10月には一時1ドル150円台をつけ、物価高騰に拍車をかけました。この趨勢は暫く続くものと思われ、物価高騰との戦いも長期化が避けられません。

翻って北海道に目を向ければ、多くの人が年初の大雪に悩まされたことと思います。一方、関東では猛暑が続き、九州等各地で大雨特別警報が相次いで発令されました。イギリスでは観測史上初めて40度を超えるなど、気候変動に伴う異変に対する戦いは年間を通じた戦いになりつつあります。

これらはおしなべて見れば、その多くが我々の予見できない不確実なものに対する不安に端を発しており、不確実なものとの戦いであったともいえるでしょう。北海道大学公共政策大学院は、このような不確実な課題に対し、予見しうる知見を提供するため、文理融合を掲げ、さまざまな課題に対して多面的に、領域横断的に研究を行っています。第17号の各論文をご覧いただければ、我々の取り組むべき課題は多岐にわたっていることがご理解いただけるかと思います。北海道大学公共政策大学院では、引き続き様々な諸課題について取り組んで参ります。

今年も多くの皆様方のご協力で本年報を刊行できたことに厚くお礼申しあげるとともに、今後とも引き続き本研究センターに対しご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2023年3月

北海道大学大学院公共政策学連携研究部
附属公共政策学研究センター長
岩谷 將